

日文協の大会を韓国で開きませんか

—— 韓国での日本文学研究状況の報告を兼ねて

染谷智幸

新年を迎えたと同時に、いきなり去年の話から始めて恐縮だが、昨春、韓国で開かれた韓国日本文化学会(二〇〇六年四月、韓国安市、祥明大学校)で講演をする機会に恵まれた。もとより私などが、そうした講演の責めを塞ぐに相応しいはずもないのだが、近年、専門の近世小説に加えて、朝鮮時代の古典小説を「冬ソナ」「チャンギム」ファンのごとくに涉猟している私を、面白がって推薦して下さる方がいらしてのことであった。私は当日、「方法としての〈東アジア〉」と題する些か大風呂敷な発表を行い、朝鮮古小説を代表する恋愛物語の『九雲夢』(金萬重)と日本の近世小説『好色一代男』(西鶴)などを題材にして、十七世紀の東アジアに何故突如として恋愛小説ブームが巻き起こったのか、また日韓比較文学研究の可能性などについて述べた。

講演終了後に分科会があり、私は古典文学のセクシオンに参加、様々な方のご発表を拝聴し質問や討議をするなどして大変有意義な一日を過ごした。私のような韓国語初心者を意識して下さってか大方は日本語でのやりとりで、ふと気付けば毎年七月に行われる日文協の大会の分科会に参加しているような気分になった。さらにそうした気分を高めてくれたのは発表者の顔ぶれだった。古典の分科会で近世から発表されたのは、韓京子氏「近松の心底劇」、金京姫氏「上田秋成の和歌と俳諧―紀行文を中心に」、李炫瑛氏「東都歳時記」の一考察―「朝鮮歳時記」との比較を中心に」の三氏であった。そのうち韓京子氏と金京姫氏はここ二三年の間、日文協の大会でも発表され、また『日本文学』にも投稿・掲載されている方たちである。お二人の発表内容は更に磨きがかかっており大いに啓発された。

大会終了後、お世話になった大会役員の金泰燾氏(韓国、韓瑞大学教授)や他の大会関係者とお話をしながら、韓国における日本文学研究の現状について伺った。その大筋は、①昨今日本語、日本文化・文学への関心が高まりつつあること、②韓国の日本文学研究者は日本の研究状況の把握に苦慮していること、③韓国独自の日本文学研究、韓日比較文学研究を模索していること、であった。若干の説明を試みておこう。

①ここ三、四年、韓国では空前の中国ブームで各大学でも中国関連学科の人氣が日本関連学科を追い越した。私も、韓国へ行くたびに日本語日本文学研究者の嘆きを聞いたものだったが、実際に中国との交流・韓国企業の中国進出などを始めてみれば、上手く行かないケースが多く、昨今中国ブームは冷め始めた状態だと言う。それと同時に日本への関心が再度高まり始めたとのことであった。この機に乗じて云々ということでは毛頭ないが、韓中関係は東アジア文化に大きく影響を与える。日本では日中・日韓の報道ばかりで、韓中関係の情報は極めて少ないが、注視しておく必要がある。

②日韓は近くなったとは言え、行き来するとなるとやはり一苦勞である。特に韓国の地方大

学に勤務している方たちからすれば尚更である。そうした状況下、最新の日本文学研究状況を把握するのに苦勞するとのことであった。また、日本の学会に出席することも難しく、人間関係も広がりにくいとのことであった。先に書いたように、私は昨今朝鮮時代の古典小説やその解説・論文等を渉猟しているが、韓国のデジタル情報によるアーカイブの公開には助かっている。特に多くの論文をウェブからダウンロードできるのは本場に有難い。翻って日本ではまだまだそうした環境に至っていない。外国のみならず日本の地方にも向けた日本文学研究のサポートとして、こうしたアーカイブの問題は焦眉の急である。

③韓国の文学研究者と話をしていると、彼等の研究方法の違いを感じることも多々ある。韓国では儒教の影響で思想・歴史といった大きな枠組みで研究を進めるケースが多い。たとえば先に挙げた金萬重であるが、日本の西鶴に匹敵する彼の専門家というのは韓国に居ない。韓国の研究者は朝鮮小説史や家門小説・愛情小説といった歴史や思想の枠組みで研究を進めているのであって、金萬重はその一環に過ぎないのである。よって日本でままた見られる注釈に始まって注釈に終わるといような微視的なテキスト・文献・書誌重視の研究は少ない。こうした傾向は韓国の日本文学研究にもあって、日本の大学院で日本的な研究方法を身につけて帰国した留学生がその方法の差異に戸惑うというのは良く聞く話である(飯倉洋一「学会時評」『国文学解釈と教材の研究』二〇〇五年九月)。ただ、これは日韓のコンフリクトのみを意味しない。相互補填の眼から見れば、韓国のマクロ的研究は日本の玩物喪志を正すだろうし、日本のミクロ的研究は韓国にきめ細かい研究を促すだろう。韓国の学者はこの点に自覚的であって、韓国を含めた東アジア的視点から日本文学を捉えなおしてみたいとのことであった。大いに期待したいところである。

さて、こうして話を伺ってゆくうちに、自然と②の問題、特に日韓の学者同士の交流に話は集中した。その日、韓国日本文化学会と日文協の近似性を感じていた私は、いつそ合同で学会を開いてみてはと提案したところ韓国側は大いに乗り気であった(と思う)。では日本に帰国してからどこかで提案しようと思っていた折、この紙面を使わせていただくことにした。たとえば、秋の大会をソウルで開いてみたらどうだろう。土曜の午前中(前日午後7時30分羽田発の便あり)に講演と講演者を中心にしたシンポジウムを開き、午後に分科会を行う。夕方は懇親会で、次の日曜にソウルの文学関連史跡を巡る。分派して板門店(北朝鮮との国境)に行くのも良い。もとより問題も沢山あるだろう。たとえば、分科会が似ていると言っても、かなりの調整が必要だ。韓国日本文化学会は、古典・近代・日本語学・日本語教育・日本学に分かれている。古典・近代は良いとして、それ以外と日文協の国語教育部門をどう組み分けるのが難しいだろう。また、近いと言っても外国、渡航費の他にパスポート代というのにかかる。果たして参加者が集まるのか。加えて韓国側との調整は大丈夫か、一回やったらその後は？

ただ、そうした不安を言い出したらきりが無い。とにかく一度やってみたらどうか。そう思うのは、ここ数年、日文協は秋の大会などで、アジアや国際性の問題を積極的に取り上げてきたからである。この時宜に叶った好企画から生まれた問題意識を持続し、更に高める為

に韓国の学会との交流は良い機会だと思う。また、この交流は日文協の問題意識に欠けている点も補ってくれる可能性がある。恐らく多くの方もお感じになっておられることだろうが、日文協の大会はそのテーマの確さ高邁さに比べて、会場の議論には物足りなさを感じてしまうことがある。発表や議論の視点がずれているというわけではないのだが、切実さがないと言ったら言い過ぎか。たとえば、アジアや国際性の問題を取り扱うならば、言葉の壁や異文化接触の問題は避けて通れない。それは有無を言わず我々に迫ってくる何かである。ところが会場では、その困難さや問題性の共有があまりなされていないように思った。

おそらく、この問題を最も切実に感じている日本文学者とは、海外で日本文学を教えている学者・教師、そして現在中国・韓国など海外から日本に来て、日本文学を学んでいる多くの留学生たちであろう。彼らが日本語や日本文化という壁にどのようにつかり、それを越えたのか、そして帰国した後、自国の文化とどう折り合いをつけるのか（リエントリーショックの克服）。これは日本にいて、日本語だけを話し、日本文化・文学に浸かっているだけではなかなか見えてこない世界である。否、見えないだけならまだしも、そうした外国の学者・教師・留学生に対する総本山的権威主義は、彼らの持つている可能性を奪いかねないのである（困ったことに、こうした総本山的権威主義者は国文学者に多く、かつ無自覚である）。とすれば、こちらから海外に出かけてゆき、現場を見て、関係者から生の声を聞くことの意味は大きいと思う。

いま、北朝鮮の核問題、日中韓の歴史認識問題など東北アジアは極めて混沌とした状況に入りつつある。その中で私が最も危惧するのは、日中韓の相互誤解があまりにも多いことだ。特に中韓両国における対日意識の悪化は深刻な問題で、この点に対する日本側の認識の甘さはまさに極楽蜻蛉である。戦前「亜細亜は一なり」（岡倉天心）に過剰に踏み込んだことへの反動もあるだろうが、歴史認識という正統なカルチャーで日本を糾そうとする中韓に、韓流というお手盛りメルヘンや嫌韓という茶化しが通用するはずがない。ますます事態を悪化させ、こじらせるばかりだ。

こうした溝をどう埋めるか。言うまでもなく特効薬などない。真摯に話し合つて相互理解を深めるしかない。そうした時、もし東北アジアで日本文学を研究する学者・学生達が率直に意見交換し合える場が出来るなら、三国交流への貢献は決して小さくない。またそのことは日本文学研究そのものにとっても資することが多いだろう。更に言えば、昨今行き詰つたと言われる日本文学研究は、東アジアという枠組みを、外的内的視座として持つことによつて、新たな道を切り拓けるのではないか。私はそう信じている、いや安吾風に言えば「一人白熱して熱狂し（坂口安吾『F A R C E について』）ているのである。